
小説家ヤンヤンの師匠

シー様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説家ヤンヤンの師匠

【Nコード】

N7129J

【作者名】

シー様

【あらすじ】

ヤンヤンが大先生の小説家に弟子入りする話

ヤンヤン弟子入り

「世の中にはツマライ小説が多すぎる。」

けど、そのツマラナイ小説も最後まで読みきると実は面白い。
だが、読みきるまでつらい。

作者は自己満足で書いているのだろう。

事前知識のない読者を置いてきぼりにしているものが多い。

「へん！！俺は、細かく情景描写を書いてるぞ！！」

「読者に対して、親切心で説明してやっているんだぞ……！」

「ぶざけんじゃねー……!……!」

この売れない小説家は、親切心を勘違いしている。細かい情景描写は、読者には関係ない。

ありがちな小説の出だしはこんな感じだろう。

「深夜。月明かりに照らされる、キラキラと輝くその女は……」

深夜？月明かり？照らされる？

それが何だと言っんだ！！！！

これだけ読んでも何も感じないぞ……！！！！！！

全く意味が無いじゃないか。！！

は~~~~目が疲れた。俺はドライアイだから、一行読むのが限界だ。好奇心もかりたてられないのに、次の行に進む気なんて起きやしない……

作者が書いた300Pの大量の文字列は、俺の中で無意味な存在となった。

じゃあ、どんな文章の始まりがいいってかって？

そんなの自分で考えろよ〜〜〜

売れないお前のことなんて、俺が知ったことかよ〜〜

売れない小説家は、翌日、俺に体を買いできた。

ハードゲイな俺にとっては、これ以上無いくらいの、ご機嫌取りだ。俺は、売れない小説家に、「ヤンヤン」という名をつけて可愛がった。。。

「しょうがない。ヤンヤンに俺の文章のテクニクを教えてやろう。

」
それは・・・

沢山の本を読んで研究して思うことを書くことだ・・・

なんて、無責任なことは、言えないな・・・

調子にのっけはしゃぎ過ぎて、何も考えてなかった。

この危機的状況をどう乗り切ろうか・・・

おおお！来た来た！！インスピレーションの神様が降りてきた。

「では、極意を教えて差し上げよう。。。。漫画家になれ！！！」

「キョトンとするな。これから、説明してやる。」

「ヤンヤンの文章がつまらないのは、自分の頭の中の映像をそのまま文字化していることにある。」

「テレビ画面で見たものをそのまま忠実に書いていると考えてくれ。

」テレビの映像には、沢山の情報がある。

例にとって見ると、交差点に車が10台いたとする。

その10台のそれぞれの色が全て違うとして。その違いを、文章で説明すると、どうなる？

右端の車は赤。隣は緑、その奥は黄色・・・

こんな文章、理解するのは面倒である。。

写真、見るほうが超簡単。

ヤンヤンの文章もこれと同じようなもので、

理解するのに、めんどろなことが、一杯書いてるのだ。

けれど、その文章を写真化、もしくは映像化して、まとめて見ると、簡単に理解できてしまう。

その写真を連続して見れば、ヤンヤンの小説は面白いと言える。

だから、映像化できる漫画家になれと、言っているんだ。

「何！？漫画家じゃなく、小説家になりたいだ。。」。

「しょうがないな~~~~この我俣ヤンヤンちゃんめ~~~~」

いちど、肉体関係を持ってしまうと、どうして、情が移ってしまうのか・・・

は~~~~情けない。

でもどうするよ。方法がないぞ。

誰にも読まれない。

小説自体が売れない、そんな状態で小説家として、食えるには。。。

おおお！来た来た！！インスピレーションの神様が降りてきた。

「権利収益だ！！その小説を漫画家やスポンサーに売り込んで作ってもらえ！。それで売れた印税を貰うんだ！」

ヤンヤンは、それを聞くなり、直ぐに売り込み行こうとした。

「まてまてまてまて。――――！！！」

「ヤンヤン・君は、馬鹿の神様か？」

「読むのが困難な小説で売り込みをするつもりか??？」

「漫画家や、スポンサーになる人は、とっても忙しいのだぞ。」

「つまらん文章を読む暇さえない。もう少し考えろよ。」

ヤンヤンは、泣き出した。

「ああ、泣き顔が可愛い、いじめたい。」

「けど、可哀想・・・」

俺は、欲情する自分に活を入れた。

「あああ！！ごめんごめん。パパが悪かった。許してくれ。」

俺は、いつパパになってしまったのだろうか・・・

「まあ、いい・・・良く聞けヤンヤン」

「ヤンヤンの本で自分が面白いと。思うシーンがあるだろう。」

「その全てで、登場人物それぞれの感情だけを離すんだ。」

「ちょっと難しいかな。。主人公と同じ気持ちになるというのもいい。」

「その気持ちと同じ感覚になれる物語を書いてみなさい。」

「単純でわかりやすい。一人称で書くのがいい。」

「全く別の物語が出来上がると思うが、同じ感動が得られるはずだ。」

「それが、出来たら後は簡単だ。

「その出来た小説で売り込みをする。

「この小説は、本体の小説で体験するであろう感動を簡単に、スポンサーに伝えることができる。

「その感動が、本体の小説に散りばめられていることを理解してもらえば、道は開ける。

スポンサーは、小説のあらすじと感動だけで、本体小説の内容を推理想象する。

それが、スポンサーの好奇心をそそるものなら、前向きに事が運ぶことだろう。

実際、スポンサーは、売り込まれたシナリオの、最初、真ん中、最後を少し読んで、

面白かったら、読み始める。

その短い時間で、偶然にも退屈なシーンが書いてあったら、その作品はボツにされる。

面白い物語は、こうして埋もれて消えていく。

書いてから10年以上経過して、世に認められる作品出てくるのは、こういう事情があるからだ。

奇跡的にスポンサーが気が付いてくれたのだ。

と、いつでもスポンサーにとっては短い時間ではない。

担当者によっては、一日100本ほどのシナリオを読み分析しているらしく、

1本に割り当てられるのは、3分ほどになる。

3分もあれば、短編小説の一つくらいは、読んでもらえる。

スポンサーは推理と想像力で、ストーリーが売れるかどうか分析し

ているのは事実である。

だから、登場人物が陥るであろう感動と、本編のあらすじを伝えられれば、

自分が思う本編に近い物語を担当者が勝手に想像してくれる。ある意味で、本編を最後まで読まれた事と同じになる。

それで、スポンサーに興味を持ってもらえたなら、勝ったも同然。仮に小説に部分的に悪い所があったとしても、スポンサー側で修正してくれる。

もともと、修正されるのが当たり前の世界である
ドラマなら主役やスタッフ、場所取りの関係で、物語が大きく変えられることもあるし、
漫画も同じで、労力やコストの掛からない抽象的表現等で、事情が変わってしまう。

また、大手では、ツマラナイものでも、売れる可能性が少しでもあれば、
専属のライターが脚色したり、9割ストーリーを変えてしまうこともある。

それでも、作者に収入が入るようになってるのだ。

まあ、都合の良い展開ばかりじゃないと思う。

だが、この感動のみを伝えるという作業は、ヤンヤンにしかできない。

小説の全容を把握しているのは、ヤンヤンだけだからだ。

もし、努力が実らなかった時は、もう一度、助けを求めればいい。
その時は、また何か良い方法を考えてやる。

ヤンヤンは、深々と、頭を下げた・

・ ・ ・

じゃあ、話も終わったところで・・・

「ヤンヤン！！、今度は、どんなプレイをしようか？」

ヤンヤンの小説が盗作されちゃった。

「何？ 小説を盗作されたって？」

ヤンヤンは自分の小説が盗作された事に激怒して俺にすがり付いて来た。

「どれどれ？ 誰がパクッたんだ？ 見せてみる」

ヤンヤンが見せてきたのは無名の作家で『小説家になろう』のシ―様だった。

「バカヤローーーーーー!!!!!!」

俺は、ヤンヤンを殴る。

「ヤンヤン・・・お前、何も判ってない・・・世の中の仕組みというものを・・・」

俺は、ヤンヤンに世の中の仕組みを教える事にした。

「ヤンヤン脱げ！ いいから脱げ！」

裸にされたヤンヤンは、プルプル震えている。

「どうだヤンヤン。冬だから寒いだろう」

「ヤンヤン・・・この寒いのが世の中というものだ。」

「誰も見てない所では、いくらそこに美貌な裸体があつたとしても無価値なのだ。」

「人に見られない事には、価値があるとしては認めてもらえないのである。」

「小説も同じである。そこに良い小説があつたとしても外の世界に

このルーチ力は宣伝して売り込まなければ、売れないのである。

宣伝費をかけずに口コミを待っていても売れない。なにせ、所詮は、チヨコなのである。

チヨコである以上、皆、その存在感を忘れてしまい口コミをするという動機に至らないのである。

「小説も、これと同じである。

所詮は小説。いくら良作だったとしても口コミで広まるものではないのである。

だが、良く考えて見る。ヤンヤンのゴールはどこだ？ 出版社が小説として売り出してくれる事だろう。

だが、その出版社も一人の読者である。読者である以上、読む所からまず考えなければならないのである。

出版社が無名の小説家の小説を読むまでの流れを考えるといい。

まず、なろうランキングを見る。レビューランキングを見る。これでオシマイだ。

そしてヤンヤンに聞くが、その中に金を払っても読みたいと思う作品はいくつあった？

恐らく、そんなに沢山無いだろう。もしくは、一冊も無いと思う。

出版社の担当者にとっても同じ事が言える。そうそう自分の欲しい小説なんぞ無いのである。

なにせ、担当者も一人の人間であり、趣味思考がバラバラなのである。

彼らの趣味にジャストフィットする様な物等、とって見つかからない。

彼らも、それが判っているのだろう。

だからこそ、殆どの出版社は外部から持ち込みを認めていない。

では、どの様にして出版社は、売れる小説を発掘するのだが・・・これに関しては、大型出版社は主に賞を主宰する。

それで審査して、一定の水準の小説になっていたら売り出すのである。

賞というブランド名を付ければ売れるというか、そういう安易な感じだ。

さつきも言ったが、コアラのルーチカと同じ現象だ。

小説は所詮小説なので、出版社もコスト掛けて宣伝しなきゃ小説は売れないのである。

しかも、口コミもなく、審査も拔けられない物は、論外なのである。

だが、審査員も一人の読者なので、趣味思考がバラバラである。

審査員が4人なら、ある意味、4つの出版社に持ち込みするとかその程度の効力しかないのである。

ヤンヤンが、「なろう」から金を払いたい作品に出会えない確率以上に、審査員達のメガネに叶う作品は到底見つからないのである。

そんな、無意味な所に応募したり持ち込むのは、確率的に無意味であると判るだろう。

だが、良く考えて見るヤンヤン・・・

ヤンヤンには、既に絶賛してくれる読者（盗作犯人）が居るのである。

審査員や担当者には認められなくても、数打てば当たると判っただろう。

沢山の人に読まれるチャンスさえあれば売れるんだ！

そして、その最善の近道が盗作なのである。

ここから先は、盗作した犯人シー様のへ理屈を聞いてみたいと思う。

俺は、盗作した犯人であるシー様の自宅に電話を掛けた・・・

すると、留守番電話の設定がしているのか

シー様は勝手に話し始めた

――

――

――

――

――

「盗作」と聞いて皆さんは、「最低な行為だ！」「将来の収益機会を奪われる」と考えるでしょう。

ですが、そんな事はありません。なぜなら、盗作する側は、それがバレた時の損害が絶大になります。信用は失墜し、業界では、まづ生きられないし、ネタ元からは莫大な損害を請求されます。

重要なのは、作者が自分のネタ元であるという事を証明するだけです。

「なろう」では、小説の投稿日を証明の採用に使えるという考え方もありますが不十分です。なぜなら小説のデータは差し替えが可能だからです

昔の作品に最近の作品のデータを差し替えても記録上は昔に投稿した事になります。また、小説のタイトル名も変えてしまえば、完全なオリジナルの様に見える事ができてしまいます。

最適な方法は、活動報告のコメント欄を利用する事です。

現在「小説家になろう」では、コメント欄の編集ができませんが、ここに投稿してしまえば良いのです。改変不能な場所に時間的な優先権で証明を残せる様な物であり、ネタ元の確実な証拠となります。

そして最も重要なのが盗作された作家に、多大なメリットがある事です。

例えば、宣伝効果です。

宣伝というとピンと来ないかもしれませんが、小説という物は宣伝しなければ金に成らないのです。出版社の目に止まりスポンサーが付くにしても、あなたの小説が読まなければ意味がありません。

しかし、小説は、毎日大量に投稿されます。その総てに出版社がチェックできる筈ありません。

皆さんは、小説の腕さえ良ければ、口コミで広まり、出版社の目に止まるとか期待していると思いますが、その考え方は甘いです。なぜなら、口コミで広まった小説が既に大量に存在します。

貴方の小説が口コミされるには、まず、先に口コミで広まった人の小説が読まれてからになるのですが、それが読み終わる頃には、その読者は小説に飽きてしまいます。飽きてしまった読者は、貴方の小説の元へは辿り着けない。辿り着いたとしても、物凄い時間が掛かります。後から小説を発表する人は不利であり、先に、口コミで広まった人にはどうしても追いつけないのです。

なので、自らの宣伝が、どうしても必要になるのですが、出版社に直接掛け合っても無意味です。なぜなら、出版社の担当者には個人的な趣味思考があり、売れるか売れないかの客観的な判断ができないのです。

その為、殆どの出版社は外部からの持込を認めず、読者の口コミに頼る形式を取るのですが、口コミ自体は先駆者が独占してしまっている為に、売れる作品の発掘が容易ではないのです。

そこで頼れるのが盗作です。

貴方の小説が盗作されたらどうなりますか？

もし、貴方の小説の盗作相手が無名だったら？

まず認知度が低いので、出版社の目が届かないです。損害は無しです。ですが、作者が一人増えた事で、小説の認知度が2倍になります。そして、もし、盗作者が運良く出版され有名になったら、その時点で訴えましょう。そうすれば、貴方自身も所有している作品が同時に認知され有名になり、宣伝活動等しなくて良くなります。

どうでしょうか？

盗作される事自体は、損害は無い様に思いませんか？

それどころか、+ になる事しか無いのです。

しかも、この考え方を広める事自体が最大の盗作防御となるのです。

というのも「なろう」で時々起こる盗作者の話題は、いつも無知であるケースが殆なのです。

あまりに作品に惚れてしまい似た様な作品を書いてしまったとか、子供が書いてしまったとか、いずれにせよ、悪意は大きくなく、市場の需要を埋め尽くす程の損害は無いものなのです。

一つだけ損害の可能性を挙げるなら、貴方の気付かない所で、目立たない様に金儲けに利用されるケースでありますが・・・

そんなの放置しましょう。市場全体規模レベルで見たら余りに小さいです。その模倣者から買う様な人が、もし、模倣者が居なかった場合に人生80年生きる間で、オリジナルの存在を知ってしまう可能性はとても低いのです。仮にオリジナルが有名な小説であった

最初にヤンヤンに話をした様に、企画書という路線から、漫画やテレビへと責める方法があるのである。

その方で結果を残せば、同時に自分の小説を宣伝しなくても売れてしまうという現象が起きてしまう。

「て・・・」

「ヤンヤンどうした！？」

「しまった！　ここは、雪山の中だった！！」

ヤンヤンと俺は、今日は、スキーで遊びに来ていた事をすっかり忘れていたのである。

本日、午後5：55分・
・

ヤンヤンは

ゲレンデで息を引き取った。

享年16才 ヤンヤン、ゲレンデで没

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7129j/>

小説家ヤンヤンの師匠

2010年10月11日18時37分発行